

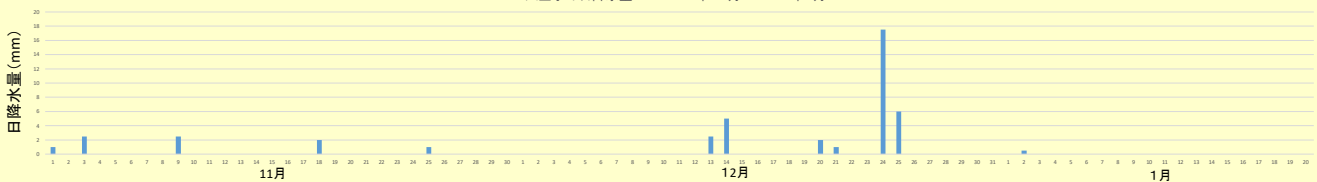
渇きの冬 冬は乾季

私たちの感覚では、冬は寒い季節です。生物はみんな化学反応で体を動かしているのに、寒いと反応が鈍ります。私たちは体温を高く保っているのに、反応が鈍ることはありませんが、体温が逃げやすくなるので、「寒さ」を感じ、体を温める行動を促し、体を守ろうとします。

植物を始め、体温を保たない生物は、寒さで反応が鈍るため、たとえば鳥などの体温の高い動物から逃げるのが難しくなります。植物は動かないので、逃げることは元々できませんが、化学反応が遅くなるのは困ります。

植物にとって、もっと困るのは、「乾く」ことです。土壌中の水が凍れば、吸水することができず、植物は乾いていきます。関東地方では、土壌が凍結することはありませんが、太平洋側の気候下であり、冬は雨の降らない季節なので、冬の初めの頃はまだ吸水できても、次第に吸水する水が不足してきます。冬の、特に後半は、植物にとって「渇きの冬」になります。

八王子の日降水量 2025年11月～2026年1月



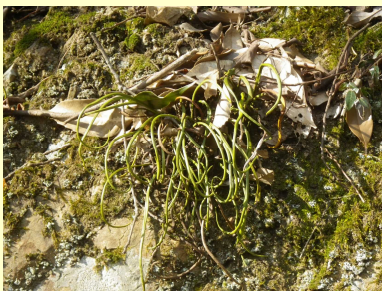
← 柔らかい葉を持つキジョランは、冬には葉が丸まって、垂れ下がっています。植物の葉は、水を含むことで自分を支えるので、脱水すると支えられなくなります。葉裏を内側に丸まると、気孔が乾いた風にさらされにくくなり、脱水しにくくなります。



↑ アオキの葉は、キジョランよりは乾燥に強くできていますが、それでも晴れた日が続くと萎れてきます。



↑ サイハイランは秋に出した葉を初夏まで保持します。光を求めてのことですが、乾燥は怖い。



← 着生植物は雨が降らない日が続くと、水を得ることができず、夏でも乾燥していきます。ノキシノブも脱水が進んできました。

→ ウチワゴケは乾燥すると葉がチリチリに縮れてしまいます。それでも水を得ると、元に戻ります。



脱水して丸まり、垂れ下がった葉は、雨が降って十分に水を吸うと、寒くても元に戻ります。だから決して寒さに反応しているわけではありません。

葉は、植物の体の中で最も水を失いやすい器官です。落葉樹や夏型の草本が冬に葉を持たないのは、乾燥対策も兼ねているからかもしれません。

地面近くに葉を持つ草本は、背が低いことで水を得やすい立場にありますが、乾燥が続くと、土壌水分が不足して、乾燥にさらされます。

↓ シイ・カシ類の葉は丈夫にできていて、乾いても見かけはあまり変わりません。それでも、外から見えないだけで、乾燥は進んでいるはずで。

